

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

現代北米先住民と博物館との協働資料管理：
ズニ博物館主導の「協働カタログ制作」プロジェクト
を事例として (民族藝術学の諸相)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 敦規 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008374

現代北米先住民と博物館との協働資料管理

——ズニ博物館主導の「協働カタログ制作」プロジェクトを事例として

伊藤敦規

抄録——本稿は、カナダと米国の先住民が博物館との過去・未来の関係をふまえて提示する、「協働^{コラボレーション}」という両者の新たな関係、および、博物館資料の管理のあり方について、文化人類学的に解釈しながら報告することを目的とする。その際、米国南西部先住民ズニ（Pueblo of Zuni）のズニ博物館・遺産センター（A: shiwi A: wan Museum and Heritage Center、ズニ博物館）が現在主導している「協働カタログ制作」計画に注目する。

Summary —— The purpose of this paper is cultural anthropological analyzing the recent trends in the relationship between the ethnological museums and the Native North Americans as source community, focusing on the current project titled “Creating Collaborative Catalog” originally proposed by the A: shiwi A: wan Museum and Heritage Center (the Zuni Museum), Zuni, New Mexico, U. S. A.

はじめに

協働とは、二者以上の主体が異なる立場から相互に不足を補い合い、協力しながら課題解決に向けて積極的に取り組むことで、補完性の原則に基づく活動のことを指す。今日の北米（カナダと米国）における先住民と博物館との間では、民族誌資料の物質的・情動的な管理を行っていく場合、この協働という概念と実践が重要かつ不可欠のものであるという認識がもたれている。

本稿は、博物館資料の管理のあり方について、博物館との過去・未来の関係をふまえて北米先住民が提示する「協働^{コラボレーション}」という両者の新たな関係を、文化人類学的に解釈しながら報告することを目的とする。その際、米国南西部先住民ズニ（Pueblo of Zuni）のズニ博物館・遺産センター（A: shiwi A: wan Museum and Heritage Center、以下ズニ博物館と略称）が近年実施している「協働カタログ制作」計画に注目する。以下ではまず、過去100年以上にわたる博物館による北米先住民の資料収集の経緯と、資料の管理のあり方について、カナダと米国の事例を紹介する。その上で、ズニ博物館のコミュニティにおける社会的機能を紹介し、彼らが目指す協働管理のあり方を、博物館との関係とコミュニティにおける社会的意味から分析する。

1 北米先住民と博物館との歴史的関係

カナダ文明博物館と先住民

ガティノウ市のカナダ文明博物館（Canadian Museum of Civilization、以下CMCと略称）は、過去150年以上にわたってカナダの先住民（ファースト・ネーションズ、イヌイット、メイティ）の資料を収集してきたカナダ国内最大規模の博物館である（注1）。フロンティア開拓のために招集されたカナダ地質調査団（Geological Survey of Canada）や、行政官、宣教師などがカナダ各地から持ち帰ったモノが、その主要な民族誌資料となっている。1910年に言語人類学者のエドワード・サピア（Edward Sapire）が率いる人類学部が地質調査団内に創設され、カナダ先住民の急速に変化する生活様式を文書化する目的で、物質文化だけではなく、無形文化遺産（歴史、物語、歌など）に関する体系的な記録・保存計画も実施された。

20世紀前半は、戦争と不況（第一次世界大戦、大恐慌、第二次世界大戦）によって運営資金が大幅に制限を受けることになり、フィールド調査の規模は縮小し、研究室での資料の整理、分析、出版事業へと重点が移行していくことになった。その後の20世紀後半と21世紀初頭は、カナダ先住民が自分たちの文化を見直す意識が高揚していった時期であり、

（注1）CMCの名称は過去に国立人類博物館（the National Museum of Man）として知られていた時期があったように、これまでに何度も移転と改称を繰り返してきた。

その一つの流れとして、都市部と地方の双方からなる先住民の代表者たちが、展示の政治性を議論する諮問委員会の設立をCMCに要求した。その結果、人類学と考古学を専門とする学芸員とカナダ全土から招聘した12名の先住民の文化的専門家から構成される諮問委員会が設立されるにいたった。これによって、1990年代には、実際に展示内容、ストーリー展開、展示物の選定、それらの解釈や展示場の空間デザインなどの協議を経て、いくつかの特別展が開催された（注2）。加えて、2003年には、「ファースト・ピープルズ・ホール（First Peoples Hall）」という先住民の生活様式に特化した館内最大の常設展示場が開設した。

この他にも、諮問委員会は先住民による国立機関の積極的な活用を奨励し、いくつかの具体的なプロジェクトを発足している。その一つが1993年に始まった「聖物プロジェクト」である。この計画では、CMCが毎年数名の先住民の代表者を館に招聘し、彼らの滞在中に聖物の確認を認め、特別な儀礼的なケアを必要とする資料の熟覧と返還交渉の協議の機会を与えている（注3）。また、1993年から続く「先住民トレーニング・プログラム」では、試験で選考した4名の先住民に対し、CMC滞在の奨学金給付と博物館業務に関する一般知識の修得のための8ヶ月間の実習期間を提供している。さらに、1991年から継続している「遺骨政策」と、2001年以降に行われている「返還政策」によって、CMCと先住民コミュニティとの間で正式な借款協定が締結されるようになった（注4）。祖先の写真や過去に録音された歌、現代の饗宴儀礼に関する写真や記録物といった特定の資料についての情報開示の請求など、学芸員とカナダ先住民たちとの間での交流は日々おこなわれている。

米国における博物館と先住民との関係の変遷

米国でも同様に、先住民と博物館の関係がこの数十年で大きく変化してきた。米国政府は建国以来19世紀後半までに、武力制圧や保留地への追放などの手段によって、先住民を駆逐・囲い込んでいった歴史を有している。その過程において、内務省内に1879年に創設された民族学局（Bureau of Ethnology）が、先住民の人骨や失われつつある文化（儀礼具、

写真、言語、様々な物質文化、生活誌、民族誌）の収集を中心的に行ってきた。収集された多くの資料は、スミソニアン協会（Smithsonian Institute）や各地の大学附属博物館などに移管された。

1930年代半ば、キリスト教化や学校教育の強制や土地の個人分割による「強制同化政策」と呼ばれた連邦政府の対インディアン政策（Indian Policy）が、『インディアン再組織法（Indian Reorganization Act）』の制定・施行によって、トライブ自治政策へと大転換を迎える。この先住民政策の転換に伴い、1939年にサンフランシスコ湾トレジャー島の金門橋万博に、先住民美術工芸品の見本市が含まれることになった。また、ニューヨーク近代美術館（MoMA）では1941年に、『米国インディアン・アート展（*Exposition of Indian Art of the United States*）』という特別展が開催されている。これらのイベントでは、先住民コミュニティから選出されたアーティストが協力者として企画段階から加えられ、彼らの主体性やアート制作の技術などが尊重されながら展示に活用された（Kabotie 1977: 68-72; Rushing 1995: 108-114）。それまでの米国主流社会の先住民へのまなざしとは異なる、先住民に「好意的」な事業が行われた希有な時期だったといえる。

しかし、第二次世界大戦への参戦に伴い、米国政府の政策全般が保守化していくなかで、再び同化主義が行われた。1950年代も先住民政府への資金援助を凍結する連邦管理終結政策の実施である。続く1960年代には、権利回復運動としての先住民運動が活発化していく。1980年代にかけての30年間は、カナダと同様、民族学系博物館における米国先住民展示や所蔵資料の扱いなどを対象とする、先住民コミュニティからの指示や提言が声高に叫ばれるようになった。さらに、先住民コミュニティが運営するトライブ博物館（tribal museum）が各地の保留地に設立したことで、資料の返還という政治的な要求も高まりをみせた。

米国については、民族学系博物館と先住民コミュニティとの関係は、1990年の『米国先住民墓地保護・返還法（Native American Graves Protection and Repatriation Act、以下NAGPRAと略称）』（公法101-601）の制定・施行によって制度的に道筋が整えられ

（注2）「大地の衣服展——極北、北西準州、高原地域、イスマウトの衣服」、「ケープ・ドールセットの9人の女流作家展」、「同時代の偉人展——平原地域とプラトー地域での先住民の放牧とロデオの生活」などがある。

（注3）例えば、タバコやスイート・グラスを焚いたり穀物を供えたりする儀式を伴うケアの実施がある。

（注4）「ニスガー最終合意」（2000年）と「ラブラドル・イスイット最終合意」（2004年）では、返還条項がカナダの国家法の修正条項として追加された。

ることとなった(注5)。本法によって、国家から運営資金を得ている米国内の博物館や連邦政府機関には、先住民側からの要求に応じて所蔵資料のリストを作成し提出する義務が生じた。また、米国先住民に関連する展示を行う場合は、企画段階から制度的に先住民コミュニティの要望を反映させるようになった。特に、人骨や聖物などが所蔵されている場合には、協議を通じて先住民コミュニティへの返還(モノと所有権の譲渡)が検討され、実際に数多く行われている。

米国の博物館側も先住民コミュニティも、NAGPRAが両者の関係を歴史的に転換する制度的な契機になるという想いから、おおむね肯定的に捉えていた。ところが、案件を処理していく中で、様々な現実的な問題に直面することになる。例えば博物館側からは、貴重な歴史的かつ民族誌的資料が返還後に十分な環境の下で保存・管理がなされず、資料としての価値の劣化が指摘された。また、返還の受け皿たる先住民コミュニティ側には、返還対象物をめぐる担当者の選定や管理方法をめぐる意志決定に齟齬が生じたこともある。一般的に米国先住民コミュニティでは、成員の誰もが聖物にアクセス出来るわけではなく、特定の宗教結社やクランに所属している特定の役割を担う者のみが、独占的に聖物に関する宗教的知識と物質的・精神的ケアの実践を担っている場合が多いためである。また、防虫駆除などの科学的処理がなされた聖物の返還によって、コミュニティに有害物質が持ち込まれるという健康被害上の問題も指摘された(注6)。

こうした実際の返還に関するさまざまな問題が表面化する中、1990年代にスミソニアン協会から聖物(軍神像)の返還に成功した米国南西部先住民ズニは、ズニ博物館が中心となって、モノと所有権の移譲というNAGPRAを基礎とする返還のあり方とは別の方法を模索し始めた(注7)。その一つの代替的方法が、「協働カタログ制作(*Creating Collaborative Catalog*)」と名付けられたプロジェクトである。

2 ズニ博物館の機能と役割

ズニ

ズニもしくはアシウィとは、彼らの言語で「私たち」を表す。ズニ保留地は、米国南西

部のニューメキシコ州中西部に位置し、保留地の面積は1,873平方キロメートルである。『インディアン再組織法』の影響によって1930年代に成立した自治政府のズニ政府(Zuni Tribe)が、『ズニ憲法』によって成員規定を定めている。2000年の国勢調査によると、ズニ政府への登録成員数は約1万2,000人で、約7,800人が保留地内に居住している。ズニ成員のキリスト教徒は少数派であり、シャラコ(*Sha'lak'o*)儀礼やコッコ(*koko*, 一般的な英語表記では*Kachina*)と呼ばれる超自然的存在を崇める伝統的な儀礼や世界観が、クランや宗教結社(*kiwitsine*, 一般的な英語表記では*kiva*)に属する成員やそれをサポートする親族によって、集客用の観光イベントとしてではなく、非成員への秘匿を堅持しながら維持・継承・実践されている。

ズニ博物館

1992年、ズニ博物館はコミュニティ成員が運営するNPO組織として設立した。一般的な博物館の機能を考える場合、収集、保存・管理、収蔵、研究、展示、そして資料を活用したアウトリーチといった6点を挙げることができるだろう。一方で、ライブ博物館たるズニ博物館に特徴的なことは、自分たちの手による自分たちの文化や歴史の表象を主眼としている側面である(注8)。この場合、情報を提示する対象は、外部から訪れる観光客や他の先住民コミュニティ成員も含まれるものの、基本的には運営主体のコミュニティ成員を主たる対象としている(注9)。

ズニ博物館による外部の博物館への働きかけ

とはいえズニ博物館の対外的機能の一つには、外部の博物館からの依頼による所蔵資料の調査・研究の実施がある。ズニ博物館のア

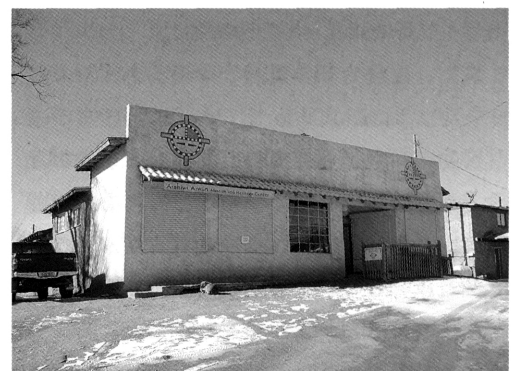


写真 ズニ博物館 2009年 筆者撮影 (Zuni Tribe Photo Permit, No. 666904)

(注5) NAGPRAの条文は米国内務省国立公園局ホームページを参照。同法の成立過程の分析や批判的検討は、Fine-Dareや太田(Fine-Dare 2002; 太田 2008)、McCoyによる*American Indian Art Magazine*誌上の連載コラムなどがある。

(注6) 米国先住民ホビの文化人類学者のマイカ・ロマオンヴァヤ(Micah Loma'omvaya)は、資料の返還後に化学薬品処理についての成分分析を行い、ヒ素が検出されたことを報告している(Loma'omvaya 2001:33)。

(注7) 軍神像の返還についてはメルル・アルボンを参照(メルル・アルボン 2003)。

(注8) 近年では、先住民コミュニティが運営するカジノのラウンジや宿泊施設での作品展示の機会が増えており、カジノがライブ博物館の役割を兼務する場合もある。

(注9) 例えば、これまでに実施してきた活動の一つに「アート地図計画(*A: shiwi Map Art Project*)」がある。これは、地図上にズニにとって歴史・宗教・言語的に重要な出来事や地名を数名のズニの画家が描き、完成した作品を通して神話等を継承していく、コミュニティ成員のための文化再生活動の一つといえる。

ウトリーチ活動には、外部博物館所蔵の資料やレプリカが使用される場合もある。ただし、そうして借り出したモノの管理情報は必ずしも正確ではないという（ズニ製、使用目的、使用方法、使用年代、素材、入手経路など）。調査・研究機関としてのズニ博物館は、諸博物館から資料の真正性の確認や、現代のズニの解釈の提供、資料管理に関する提言を求められてきた。例えば、ニューメキシコ州サンタフェの先端調査研究所（School for Advanced Research、旧称 School of American Research、以下 SAR）附属インディアン美術リサーチセンター（Indian Art Research Center、以下 IARC）は、南西部先住民の土器・宝飾品・絵画・織物・木彫人形など、約1万2,000点を所蔵している。2009年4月、ズニ博物館はこれらの中で「ズニ製」という管理情報が付されている資料について、ズニ製・非ズニ製の確認、使用目的の説明、聖物の有無の確認やそのケアの方法の提示などの項目からなる調査依頼を受けた。結果として、IARC 所蔵の半数以上の資料情報に誤記が認められた。

こうした誤表記はしばしば他の博物館資料にもみられるため、ズニ博物館のスタッフは、依頼を受けた博物館以外にも積極的に足を運び、熟覧作業による真贋の見極めや、管理情報の修正や書き加えを逐次行うようにしている（注10）。過去においてすでに失われ、将来的に失われると予測されるズニの伝統文化について、若い世代のズニ成員や保留地を離れて都市で暮らす成員が、外部博物館の管理する誤情報を頼りにして誤った歴史認識や自文化の解釈を行わないように、現代の伝統的知識の保持者と協力して対応していくことを、ズニ博物館は活動の根本原理の一つとしているのである。

トライブ博物館としての諸特徴

さて、文化人類学者のジェームス・クリフォード（James Clifford）は、米国のトライブ博物館に共通してみられる存在意義や問題設定について以下の4項目を挙げている。第1に、そのスタンスは宗主国のメジャーな博物館とは異なり、ある程度対抗的なもので、排除されてきた経験や植民地的過去、そして現代の闘争が展示に反映される点。第2に、芸術／文化の区別はしばしば適切でないとき

れ、あるいは積極的に転覆される点。第3に、統一された直線的な大文字の歴史という概念は（国民の歴史であれ、人類の歴史であれ、芸術の歴史であれ）、コミュニティやローカルの複数の歴史によって批判される点。第4に、収集品が（国民的芸術・偉大な芸術などとして）遺産に登録されることを望んでおらず、むしろ国民的遺産や世界的遺産から自由であり、それらとは異なった伝統や実践のなかに刻みこまれることを目的としている点である（クリフォード 2002:146）。

ズニ博物館内の展示スペースには、人骨の返還に用いられた木箱が収奪の歴史解説パネルと共に再現展示されていたり、過去の民族学者・人類学者を文化の収奪者としてリスト展示しているほか、「アート地図計画」の作品展示によってズニによる土地と歴史の解釈の提示がみられる。そしてなによりも、特定の儀礼具や聖物を来館者の目から遮断し、クランや宗教結社による排他的な管理を委ねるスタンスをとっていることから、おおむねクリフォードの挙げるトライブ博物館の諸特徴が該当する。

伝統的知識の管理

ズニ博物館の設立目的とも関わる重要な問題であるので、クリフォードのいうトライブ博物館の第4の特徴に関連する「不特定多数への情報の非公開」ともいべき伝統的知識の管理についてももう少し詳しく説明しておきたい。当館は開館までの約30年間で、モノや情報を調査・研究し、収集（返還）し、管理・収蔵し、公開するという博物館の基本的な機能をめぐる議論に費やしてきた（Isaac 2005, 2007）。この議論に慎重になる理由は、ズニ博物館が調査・研究対象としてきた外部博物館の所蔵資料の中には、あまねくズニ成員がアクセス可能なものだけが含まれているわけではないこと、そしてそうした非公開を原則とするモノの調査報告や返還後のズニ博物館での展示の可否が争点となったためだ。

先述したように、降雨や世界の調和を願う諸儀礼や世界観は、特定のクランや宗教結社に加入した成員が、指導者から実践に必要な知識を、適時、口頭で継承しながら占有していく。非ズニ成員や、他の宗教結社の成員や、結社に加入する以前の子どもなどへの知識の共有は制限されるのである。儀礼に用いられ

（注10） SAR 附属 IARC 以外の資料熟覧を実施した博物館には、ハーバード大学附属ピーボディ博物館（マサチューセッツ）、ブルックリン博物館（ニューヨーク）、スミソニアン協会（ワシントン DC）などがある（Isaac 2005:4）。

る道具や祭壇や神像などの聖物それ自体や、その用途、描かれる意匠の意味なども、部外者に対して秘匿性を帯びる内容とされる。

とはいえ、そうしたモノがすでに外部の博物館に所蔵されている事実がある。また、1879年に内務省民族学局からスティーブンソン夫妻 (James and Matilda Coxe Stevenson) が初めてズニに派遣されて以降、民族学者と人類学者たちによる神話や宗教研究などを含めた総合的な現地調査と研究成果の多くは、既に出版されている (注11)。ズニ博物館では、過去の研究者達をリスト化し、秘匿性の公開に対する批判的な見解と共に展示している。カチーナ人形研究の大家であるバートン・ライト (Barton Wright) が述べているように、よそ者 (研究者だけではなくズニの非結社成員を含めて) がズニの宗教実践を記述し、公開することは、当時から慣習的に「禁止」されていたのである (Wright 1985:2)。かろうじてソース・コミュニティ成員が納得する公開方法とは、彼らの協力を得て、写真ではなく彼らが描く絵画などの美術工芸品を介して、彼らに説明を求めて部分的に記述するやり方しか残されていないと思われる (伊藤 2009)。

19世紀後半から20世紀半ばにかけて、ズニの宗教や世界観に関する研究成果が出版できたのは、単に研究上の倫理意識が欠如していたと結論づけるのではなく、例えば、ソース・コミュニティから学界へのさまざまな「距離」(検閲のための通信手段の整備、学会誌などの出版物流通へのアクセス、識字率など) が保たれていたためだろう。現代ではここで述べたような「距離」は格段に縮まっているため、学者が「学問の神聖性」や「学術調査と出版の自由」を振りかざすことはできないし、一般の観光客も保留地内での写真撮影にはトライブ政府からの許可取得が義務づけられている (注12)。ズニ成員間でも宗教実践に関する行動規範が存在し、それは外部博物館の所蔵資料を調査・研究するズニ博物館にも該当する。そのためズニ博物館は、基本的には館員だけの単独資料熟覧調査や、その即時的な成果公開を行わない。特定の専門的知識を占有してきた集団の指導者達と協力関係を保ちながら、以後の対応や管理のあり方を協議し、その過程を経てから必要な場合には所蔵先博物館に提言を行うのである。ま

た、ズニ成員へのアウトリーチ活動を行う場合にも、基本的には館員だけで行うのではなく、伝統的知識の保持者の同席が慣例化している。つまり、ズニ博物館のコミュニティにおける社会的役割とは、伝統的知識に関する渉外窓口とコミュニティ内のコンセンサス作り、およびコンセンサスの再生産の窓口といえよう。

3 「協働カタログ制作」計画

2010年現在、ズニ博物館は「協働カタログ制作」プロジェクトに重点的に取り組んでいる。これは、モノと所有権の委譲という米国での NAGPRA 以降に主流となった返還とは異なる、博物館と先住民コミュニティの新たな関係性構築に向けた動向といえる。

具体的なプロセスは7段階からなる。①外部の博物館が所蔵するズニ関連資料を管理情報と照合しながら熟覧する。②管理情報に修正を施し、伝統的知識に関する記述を書き足す。③それらの情報をズニ博物館が管理するPCからアクセス可能な情報技術システムを開発する。④資料画像と管理情報を、新システムに汎用可能なフォーマットに移行する。⑤ズニ・コミュニティ内の重層的な宗教的・伝統的知識の管理形態を反映させるために、逐次、宗教結社やクランの指導者による確認作業を依頼する。⑥公開可能な資料をソース・コミュニティ全体にオープンにする。⑦閲覧者が思い思いにその資料に関する記憶や使用方法や制作技術をデータベースに書き加えることを推奨する。

このように、「協働カタログ制作」とは、サイバースペースにモノに関するコミュニティの記憶装置を創造する一種の回想法の応用といえる。そもそもズニ政府や米国政府は世界各地の博物館が所蔵するズニ関連資料の情報や来歴を一元化して管理しているわけではないので、現代のソース・コミュニティは、ズニに関する資料の所蔵先や、数量、管理方法の実態といった、世界中に分散した自分たちの過去を包括的に知る術をもたない。各博物館収集担当者が制作者から直接仕入れる場合は、来歴が明記されるものの、それ以外にも、盗掘などの手段でソース・コミュニティから知らぬ間に収奪されたり、成員が個人的に譲渡したものがその後直接・間接的に博物館に寄贈されたり、転売されていくように、

(注11) 例えば、Cushing 1891-92, 1892; Fewkes 1891; Stevenson 1901-1902; Kroeber 1917; Bunzel 1929-1930; Benedict: 1935; Parsons 1923, 1933などがある。

(注12) 特に儀礼時には至近距離からの見物も、写真撮影・スケッチ・音声録音・ノートへのメモといったあらゆる記録行為が禁じられる。例えば儀礼の見物については、ズニの中でのその儀礼を司るクランや宗教結社の成員、その他のズニ成員、他の米国先住民、非先住民の観光客といったように、接近距離が階層化されており、それに従わない場合はズニ・トライブの警察から警告を受け、その場から排除される。

博物館資料というものは様々な経路を経て最終的な所蔵先の博物館に収集されていくのである。さらに、博物館の収集担当者が、ズニ製を騙る非ズニ製の品をギャラリーなどの仲介者を通して間接的に購入したり、管理情報を誤って資料リストに記載してしまった場合には、資料が解説文と共に展示されていたり、データベース化されて外部からアクセスできる状況にない限り、その正誤を確認する術は管理情報との照合による資料熟覧しか残されていない。

外部の博物館側が管理している資料情報が必ずしも正確な記述によって構成されていたわけではないことを、ズニ博物館関係者はSARなどでの調査から経験的に理解していた経緯がある。さらに、外部の博物館は地理的にもズニ保留地から遠く離れた場所に立地していることが多く、コミュニティ成員が情報確認のためにその都度費やす移動時間や費用や申請の手続き上の手間など考慮すると、保留地にいながらにして外部の博物館とつながりを確保する手段の構築がより望ましい方法として希求されてきた。時間的かつ空間的な移動を伴わず、国家法NAGPRAによる返還や法的措置も必要とせずに、外部の博物館が所蔵する資料にアクセスできる方法の一つが、インターネットを活用したオンライン・カタログの構築であった。確かに、アクセス方法や資料への情報と伝統的知識の書き込みや人物の確認手段など、いくつかの規定づくりは必要だろうが、外部の博物館所蔵資料とソース・コミュニティを接合する双方向的なインターネットの有用性と活用が、ズニ博物館の担当者間で期待されるようになっていったのだ。

2009年度に米国の博物館・図書館サービス機構から助成金を獲得したことで、「協働カタログ制作」計画は現実味を帯びていく(注13)。2009年12月、情報システム構築に関する第1回会議がズニ博物館で開催され、研究組織に名を連ねる北アリゾナ博物館、デンバー美術館、デンバー自然科学博物館、UCLA情報学部、ケンブリッジ大学附属人類学・考古学博物館から館長や研究者が参加した。

この会議では、米国内外の博物館所蔵資料のデータを一元化する技術的方法が検討されたほか、ズニの多層的な伝統的知識の管理体系を反映させるための部分的公開の方法(ユ

ーザー全てに公開、ズニ成員にのみ公開、ズニの特定の社会・宗教的役割を担う者のみに公開など)、公開後のズニ成員による書込の方法、書込内容を即時にアップロードせずに専門的知識の保持者による確認を行う「パーキングロット」と称される仮想空間の設置とその方法、博物館が資料情報の管理に使用しているシステムと新規システムとの汎用性の検討など、多岐にわたって議論が交わされた(注14)。現実化に向けた技術上の様々な難関が明らかになったものの、所蔵先の博物館とソース・コミュニティ双方にとって現実的で有益な手段だということが再確認された。

4 おわりに

現在進行中の研究助成課題では、米国から5機関、英国から1機関の博物館および大学が参加しており、現状では英語圏以外の諸国にある博物館は正式な研究組織として加わっていない。ただし、ズニ博物館としては、研究助成期間が終了した後も「協働カタログ制作」計画の継続的発展を希望しており、他の米国内博物館をはじめ、ヨーロッパやアジアの民族学系博物館との協力関係構築も視野に入れている。

欧州諸国や日本などの博物館が管理しているズニ関連資料は、オンラインのデータベースが公開されていれば、ズニ博物館やコミュニティ成員もアクセスが可能である。しかし、記載内容の確認には言語的な障壁が存在する(ズニ保留地内ではズニ語と英語が使用されている)。幸い2011年春までに新システムが完成する見通しがたったので、非英語圏諸国の博物館にも「協働カタログ制作」計画への参加を求める計画が立てられている。それが実現すれば、より包括的で分厚く、多言語的な世界規模のデータベースがソース・コミュニティにもたらされることになるだろう。これは単なる絵物語ではなく、ズニ博物館長は2009年来日し、大阪府の国立民族学博物館(以下、民博)にて熟覧作業を実施している(Enote 2009)。その際、民博館長に直接口頭で「協働カタログ制作」計画への参加協力を求めた。協働という考え方に基づく博物館と北米先住民コミュニティとの関係は、歴史的な植民地政策の有無を問わず、世界へと応用的に拡大していく過程にあるといえよう。(いとう あつり)

(注13) 研究課題“Creating Collaborative Catalogs: Using Digital Technologies to Expand Museum Collections with Indigenous Knowledge” 助成番号 LG-24-09-0106-09。

(注14) 「協働カタログ制作」計画の情報システム開発は、Srinivasan, Enote, Becvar and Boast 2009; Srinivasan, Boast, Becvar and Furner 2009a, 2009b; Srinivasan, Becvar, Boast and Enote 2010; Becvar and Srinivasan 2009に詳しい。

謝辞 本稿は、民族藝術学会第26回大会（2010年4月25日、江戸東京博物館）での発表内容に加筆・修正を加えたものである。なお、本研究の遂行にあたり、平成22年度科学研究費補助金・特別研究員奨励費（伊藤敦規代表、「北米先住

民ホピの知的財産権問題をめぐる文化人類学的研究」、課題番号21929）の交付を受けた。

参考文献

- Becvar, Katherine and Ramesh Srinivasan
2009 "Indigenous knowledge and culturally-responsive methods in information research." *Library Quarterly* 79(4), pp. 421-442.
- Benedict, Ruth
1935 *Zuni Mythology*. Columbia University Contributions to Anthropology 21, New York.
- Bunzel, Ruth
1929-1930 *Introduction to Zuni Ceremonialism, Zuni Origin Myths, Zuni Ritual Poetry, Zuni Kachinas*. 47th Annual Report of the Bureau of American Ethnology. Washington, D. C.
- Clifford, James
1997 [2002] *Routes: Travel and Translation in the Late Twentieth Century*. Cambridge, MA: Harvard University Press. 毛利他（編）『ルーツ——20世紀後期の旅と翻訳』、月曜社。
- Cushing, Frank Hamilton
1882-1883 [1970] *My Adventures in Zuni*. Palo Alto, CA: American West.
1891-92 *Outline of Zuni Creation Myths*. 13th Annual Report of the Bureau of American ethnology. Washington, D. C.
1892 "A Zuni Folktale of the Underworld." *Journal of American Folklore* 5(6), pp. 49-56.
- Enote, Jim
2009 *A Review of Zuni Objects at the National Museum of Ethnology Osaka, Japan: First Steps Towards Creating a Collaborative Catalog*. (Submitted to the National Museum of Ethnology) 伊藤敦規訳「国立民族学博物館ズニ資料熟覧報告書——協働カタログ制作に向けた第一歩として」
- Fewkes, Jesse Walter
1891 "A Few Summer Ceremonials at Zuni Pueblo." *Journal of American Ethnology and Archeology* 1, pp. 1-157.
1903 [1985] *Hopi Kachinas: with 260 Illustrations, Including 70 in Full Color*. Mineola: NY: Dover Publication.
- Fine-Dare, Kathleen S.
2002 *Grave Injustice: The American Indian Repatriation Movement and NAGPRA*. Lincoln: University of Nebraska Press.
- Isaac, Gwyneira
2005 "Mediating Knowledges: Zuni Negotiations for a Culturally Relevant Museum" in *Museum Anthropology* 28(1), pp. 3-18.
2007 *Mediating Knowledges: Origins of a Zuni Tribal Museum*. Tucson, AZ: The University of Arizona Press.
- 伊藤敦規
2009 「循環する生と死——米国南西部先住民ホピの靈魂観」『アジア遊学』128号（特集：古代世界の靈魂観）、pp. 172-184、東京：勉誠出版。
- Kabotie, Fred
1977 *Fred Kabotie, Hopi Indian Artist: An autobiography told with Bill Belknap*. Flagstaff, AZ: Museum of Northern Arizona with Northland Press.
- Kroeber, Alfred
1917 *Zuni Kin and Clan*. Anthropological Papers of the American Museum of Natural History 18 (2), New York: American Museum of Natural History.
- Loma'omvaya, Micah
2001 "NAGPRA Artifact Repatriation and Pesticides Contamination: The Hopi Experience", *Collection Forum* 17 (1-2). The Society for the Preservation of Natural History Collection, pp. 30-37.
- McCoy, Ron
"Legal Briefs" *American Indian Art Magazine*.
メリル、ウィリアムとリチャード・アルボン
2003 [1997] 「ズーニーの彫像——天使と軍神」アミー・ヘンダーソンとエイドリアン・ケプラー（編）（松本栄寿、小浜清子訳）『スミソニアンは何を展示してきたか』、pp. 180-204、玉川大学出版部。
- 太田好信
2008 『亡霊としての歴史——痕跡と驚きから文化人類学を考える』（叢書文化研究6）、人文書院。
- Parsons, Elsie Clews
1918 "War God Shrines of Laguna and Zuni" *American Anthropologist* 20 (4), pp. 381-405.
1923 "Origin Myths of Zuni" *Journal of American Folklore* 36 (140), pp. 135-162.
1933 *Hopi and Zuni Ceremonialism*. Memories of the American Anthropological Association 39, Menasha, Wisconsin.
- Rushing, Jackson
1995 *Native American Art and the New York Avant-Garde: A History of Cultural Primitivism* Austin, University of Texas Press.
- Srinivasan, Ramesh, Jim Enote, Katherine Becvar, and Robin Boast
2009 "Critical and reflective uses of new media technologies in tribal museums." *Museum Management and Curatorship* 24(2), pp. 169-189.
- Srinivasan, Ramesh, Robin Boast, Katherine Becvar, and Jonathan Furner
2009a "Digital museums and diverse cultural knowledges: Moving past the traditional catalog." *The Information Society* 25(4), pp.

- 265-278.
- 2009b "Blobjects: Digital museum catalogs and diverse user communities." *Journal of the American Society of Information Science and Technology (JASIST)* 60(4), pp. 666-678.
- Srinivasan, Ramesh, Katherine Becvar, Robin Boast, and Jim Enoté
 2010 "Diverse Knowledges and contact zones within the digital museum." *Science, Technology, and Human Values*.
- Stevenson, Matilda Coxe
 1901-1902 *The Zuni Indians*. 23rd Annual Report of the Bureau of American Ethnology. Washington, D. C.
- Wright, Barton
 1985 *Kachinas of the Zuni* Flagstaff, Northland Press.
 〈ウェブサイト〉
 National Park Service U. S. Department of the Interior
 National NAGPRA (2011年1月22日) (<http://www.nps.gov/history/Nagpra/MANDATES/INDEX.HTM>)
 Zuni Tourism Department
 Zuni: a Village of Artists.... (2011年1月22日) (<http://www.zunitourism.com/villageofartists.html>)